

# 令和六年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日(午後) 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は17ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答用紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答用紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督の先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつて東京で小学校教師をしていた黒羽三吾は、退職して息子の真司とともに田舎に戻る。そこで父が経営していたパン屋「クロハ・ベーカリー」を手伝うことになった。ある日、真司と同じ小学校に通う一條茉由利が、パンの万引きをしていることに気づき厳重に注意したが、それ以来三吾は茉由利のことを気にかけるようになった。

「ぼくの名前は黒羽三吾。由来はこのクロワッサンだよ」  
冗談だと思ったのか、不審そうに見つめてくる視線は気にせずつづける。「うちで買ったのは自分の朝ごはん？ それとも、家族のぶん？」

「自分のぶん」

「お父さんかお母さん、あるいは父母の代わりとなる保護者の人は、朝食を用意してくれないんだね」

「三百円だけくれる」

なるほど三百円なら買えるパンはあるけれど、うちのサンドイッチは買えない。育児放棄、という言葉が脳裏をかすめる。

「それで万引きしたと」

「まあ、そう。余ったお金でコンビニでお菓子も買えたし」  
「こう言っちゃなんだけど、三百円の予算でうちの店は、ちよっときついんじゃない？」 小振りのパンでぎりぎりふたつ、それ以外なら買えて一個で、買えない商品も少なからずある。

「スーパーやコンビニの既製品なら、もっとたくさん買えるだろ」

「ずっとそうしてたよ。でも、毎日同じようなのばっかになっちゃうし、飽きちゃうし。そんなとき、たまたまここを見つけて。高かったけど試しに買ってみたらすごくおいしくて、忘れられなくなつて」

① パン屋冥利に尽きる言葉である。

「ありがとう、嬉しいよ。でもだからって万引きは困るなあ。うちもほんとかつかつなんだよ。とくに最近はお麦が高騰してて、ほんと大迷惑な——」と愚痴っている場合ではない。「万引きは、ほかの店でもやってたの？」

きつ、と睨んでくるが、もぐもぐと口が動いているので先ほどまでの鋭さはなかった。あらためて、彼女はまだ小学四年生なんだよなと思う。

「ここが、初めて。信じないなら、べつに信じなくてもいいけど」

信じるよ、などと言うのは簡単だが、かえって薄っぺら

いかと思いい口には出さなかった。ただ、本当のことを話している気はしていた。態度ほどには品行が悪いわけではないと感じはじめている。

「一條さんは、ご両親と住んでるのかな」

彼女は一個目を食べ終わり、まだ袋に残るクロワッサンに視線を向けたので、どうぞ、と手のひらを差し出した。ふたつ目に手を伸ばしながら告げる。

「ううん、お母さんだけ」

「夕食はつくってくれるの？」

「いちおう。簡単なものだけ。でも仕事でいないから、レンジでチンして、食べるのはひとり」

「お母さんは夜に仕事をしてるんだね」

「夜勤、つてやつ。夕方に家を出て、帰ってくるのは明け方」  
万引きの話と離れはじめたからか、茉由利が発散していた尖った雰囲気はかなり和らいでいた。クロワッサンの効果もあるだろうし、私は敵ではないと信じはじめてくれたのかもしれない。いずれにしても万引きの本質的な原因に近づいている感触はあった。

② 欲しいから、買えないから、などというのは二次的な理由にすぎない。

いわゆる水商売ではなく、夜から朝にかけて働く夜勤であれば、母親はほとんど昼夜逆転した生活を送っているは

ずだ。

「だったら、母親とゆっくり話す時間はほとんど取れないか」

「まあ、そうかな。起きたあと出かけるまでずっと忙しいそうにしてるし」

「寂しいよな」

「べつに。夜勤の仕事を始める前に話もしたし、あたしも納得したし」

ぶっきらぼうな言い方に、かえって強がりを感じる。

③ 親子関係が破綻しているわけではないのは安心できる材料だった。彼女は聞き分けのいい子どもである可能性も高い。とはいえ、いくら納得済みだったとしても事前の想像と現実の違いは違っていたはずだし、たったひとりの肉親に甘えられないのはこの年ごろの子どもにとってはつらいことだろう。

(中略)

パン屋の店員が介入することではないし、手を差し伸べる相手でもない。

万引きがいかに悪いことを論し、もう二度と万引きはしないと約束させ、解放する。そんな結末を思い浮かべる。

「でも——」

ふいに茉由利がつぶやいた。透明の皮膜をまとった澄ん

だ声だった。手に持ったクロワッサンの、幾重もの層を数えるように断面を見つめる。

「宿題を、見てくれないんだ。時間がないからって。だからいつも先生に怒られる。それは、すごく腹立つ」

初めて、X 一條茉由利を見た気がした。

「宿題……親に丸つけてもらってから提出してくださいってやつだよな。間違ったところは、ちゃんと親に教えてもらって、解き直しをしてからって」

「うん。よく知ってるじゃん」

「先生に言ったのか、お母さんは忙しくて宿題を見る余裕がないって」

わたしの声はわずかに震えている。

「言ったよ」茉由利は唇を尖らす。「でも、丸つけくらいはできるだろうって、ちゃんと聞いてくれなかった。だからなんかもう、説明する気もなくした」

その担任の先生を、元同業として、責める気持ちにはなれなかった。

④ 先ほどから、胸の奥が痛い。一年前の夏に抱いた思いが、再び胸を締めつける。

「真司！ できたから、テーブルに運んでくれるかー」

「はい」

真司が見ていたタブレットを置いてやってきた。

親子三人で住む東京都内のマンションの一室。キッチンとダイニングを隔てるカウンターに置いた料理を、息子がテーブルに運んでくれる。

(中略)

最近わたしも真司もすっかりテレビを見るのが減ってきたが、料理中はラジオをかけていて、食事のときもそのまま流すのが習慣になっていた。空間に適度に彩りを加え、テレビほどには主張しすぎない感じがちょうどよかった。

食事に集中していてちゃんと聞いていたわけではなかったが、あるフレーズが耳朶を打った瞬間、アナウンサーの声が脳内に大きく響く。番組と番組のあいだの短いニュースのようだった。

『——マツムラユリ容疑者を逮捕したと発表しました。四歳だった実の息子、リクトくんを虐待し、内縁の夫と共謀して殺害した容疑です。つづいて明日の関東地方の——』

マツムラ、ユリ……。聞き間違いでなければ、たしかにそう言っていた。小学四年生の、無邪気な笑みを見せる女の子が浮かぶ。

「お父さん、どうしたの？」

息子に声をかけられ、野菜を箸で掴んだまま固まっている

たことに気づく。垂れた甘酢あんが、つーつとあとを引いてテーブルに落ちた。

「あつ、いや、ちよつと思ひ出したことがあつて。大したことじゃないよ」

そんな必要もないのに言い訳するように妙に早口になっていた。

ティッシュでテーブルの汚れを拭き取りながら、心なかで、まさかな、とかぶりを振る。マツムラユリという名前は珍しいものではない。年齢も今年で、二十歳くらい。四歳の子どもがいるのは早すぎる。いても、不思議ではないが……。

食事を終え、食器を食洗器にかけたあと、居間のソファに深く腰かけながら先ほどラジオで聞いた事件をタブレットで検索する。

⑤ すぐさま出てきた『松村結梨容疑者(20)』という文字に心臓が跳ねた。名前の漢字も、年齢も一致している。

わたしは気づいていなかったが、当初は松村結梨の内縁の夫だけが逮捕されていたようだ。その後の取り調べで彼女も虐待に積極的に加わっていたと見なされ、今回の逮捕に至った。

さらに調べて見つけた顔写真を見て、確信する。

わたしの知っている、松村結梨だと。

初めて学級担任についたのは四年生のクラスで、そこに彼女はいた。とにかく明るく元気で、屈託のない弾けるような笑顔が未だ強く脳裏に焼きついている。将来はアイドルになって、武道館で歌って踊るのだと無邪気に夢を語っていた。

ただし勉強は得意ではなく、宿題を忘れたり、やってこなかったりすることもたびたびあった。

地域差はあるのだろうが、自分が子どものころ、宿題の丸つけを親にやってもらってから提出する、というやり方はなかったように思う。教員になるために勉強しているとき、最近はこの方法が出てきていると知ったのである。

理由はさまざまにあり、親自身に学習に参加してもらうのが大きな目的のひとつだろう。通知表の数字や教師の評価だけでなく、自分の子がなにご得意でなにが苦手かをじかに知ってもらい、親子による学習の機会を促すためである。親の負担は多少増えるが、子どもにとってもうまいやり方だと思う。

一方で、教員の負担軽減という側面も一部にはあるだろう。確認するだけなら時間も手間もかなり省ける。もっとも、きちんと見ようとすれば親による丸つけの有無にかかわらず、時間はかかるものだ。

( 中 略 )



ある日、<sup>⑦</sup>松村結梨は訴えていた。親が宿題を見てくれないと。

彼女は母子家庭で、母親は夜に飲食店で働いていた。父からの経済的援助はおろか、交流すらなかったはずだ。

訴えたといっても彼女の表情に真剣みはなく、ちょっとした愚痴、という感じで言っていたように思う。それだけにわたしは真剣に受け止めず、丸つけがされていなければ先生が見るけど、なるべく親に見てもらえるようにしてくれとか、おざなりな対応をしただけだった。

初めての学級担任で毎日が手いっぱいだったし、いまか

問一——線部①「パン屋冥利に尽きる言葉である」とありますが、このときの三吾の気持ちを説明したものととして、もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たまたま買ったパンの味にほれこんでから、定期的にお店を応援してくれていることがわかり、パン屋としてうれしく思っている。

イ パンを万引きされてしまったのは残念に思うが、何よりそのパンの味にほれこんでくれたのをありがたく思っている。  
ウ 既製品のパンと変わらずおいしいという菜由利の言葉を聞き、パン屋を始めてよかったと自らの決断の正しさをかみしめている。

エ 少額の小遣いを渡されるだけで育児放棄されている菜由利を、クロハベーカーリーのパンが支えていることを知り、喜びを感じている。

ら振り返れば、何十人もいる子どもたちひとりひとりに向き合う余裕がなかった。想像力もまだまだ足りていなかった。

勉強は苦手だし相変わらず宿題をやってこなかったりしたけれど、松村結梨は明るく元気な子で、彼女は大丈夫だろうとなんとなく思っていた。

(伽古屋圭市『クロワッサン学習塾』より)

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

問二 — 線部②「欲しいから、買えないから、などというのは二次的な理由にすぎない」とありますが、これを説明したものとしてみてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 茉由利がパンを万引きしたのは別の理由があるが、その理由を話してもらうには相当な時間が必要となる。
- イ 茉由利がパンを万引きした根本的な原因は、母親しかいない家庭環境から生じた満たされない気持ちだといえる。
- ウ 茉由利がパンを万引きしたのは、母親が家にいない寂しさをパンのおいしさでうめようとしたからである。
- エ 茉由利がパンを万引きしたのは、孤独感を強めた結果、母親に反発しようと思ったからである。

問三 — 線部③「強がりを感じる」とありますが、ここでの「強がり」とは茉由利のどのような心情のことですか。次の文のA・Bにあてはまる語句を指定された字数で答えなさい。

三吾からの [A (十五字以内)] のではないかという指摘に対し、 [B (漢字二字)] に受け答えできない心情。

問四 文中の [X] にあてはまるものとしてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア どんな向かい風にも立ち向かう、勇敢な
- イ 感情をおさえられない、自分勝手な
- ウ 未練がましく、いつまでもこだわり続ける
- エ なんの鎧もまもっていない、生身の

問五 — 線部④「先ほどから、胸の奥が痛い。一年前の夏に抱いた思いが、再び胸を締めつける」とありますが、このときの三吾の気持ちを四十字以内で答えなさい。

問六 — 線部⑤「心臓が跳ねた」とありますが、このときの「三五」の様子としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 昔の教え子の事件を目のあたりにして残念に思っている様子。

イ 意外な人物の名前に胸の高ぶりをおさえられない様子。

ウ まさかと思っていたことが現実<sup>こうかい</sup>に起こり後悔している様子。

エ 嫌な予感<sup>いや</sup>が的中し、驚き<sup>おどろ</sup>をおさえることができない様子。

問七 — 線部 a 「無邪氣に」 b 「おざなりな」の文中での意味としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

a 「無邪氣に」

ア まじめな様子で

イ あどけない様子で

ウ 若々しい様子で

エ 力強い様子で

b 「おざなりな」

ア 誠意<sup>せいい</sup>のない

イ ほとんど意味のない

ウ 相手を裏切るような

エ だらしない

問八 — 線部⑥「宿題の丸つけを親にやってもらってから提出する」という宿題の出し方には、どのようなねらいがあると三吾は考えていますか。「〜ねらい。」に続くように三十字以内で答えなさい。



問九 — 線部⑦「松村結梨は訴えていた。親が宿題を見てくれないと」とありますが、この訴えを受けたときの三吾の説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 親が娘の宿題の面倒を見るのは当然のことなのに、結梨自身に宿題の丸つけの責任を押しつけるような発言をしてしまった。

イ クラスには様々な子どもたちがいるため、結梨一人のちょっとした愚痴だけにかかりきりになることはできなかった。  
ウ 初めての学級担任で経験が浅いこともあって、生徒の様子からどのような問題を抱えているのかを予測して判断する力がなかった。

エ 結梨は自分の悩みを素直に表現することが苦手だったが、三吾はその様子をそのまま受けとり、丁寧に悩みに対処しなかった。

問十 いま目の前にいる「茉由利」とかつての教え子である「結梨」の二人を、三吾はどのようにとらえていますか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 食事の準備などをしてくれる母に茉由利はきちんと感謝することができる。結梨の母は結梨との交流が薄く、それによつて結梨は明るく元気な性格を失ってしまった。

イ 茉由利は素直に自分の気持ちを話すことが得意で、まっすぐな性格の持ち主といえる。結梨は本当の気持ちを隠し、明るく元気な子を演じて過ごしている。

ウ 茉由利は相手を圧迫する態度をとつても、誠実さを持ち合わせている。結梨は明るく活発な態度のうらで、心の中に深い悩みを抱えている。

エ 茉由利は勉強が得意だが親に宿題を見てもらえないことに悩んでいる。結梨はそもそも勉強が苦手であるため宿題を親に見てもらえずに苦労している。

問十一 「三五」の人物像を説明したものとしてみっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 教師としての素質がもとからあり、子どもが置かれている環境や心情を丁寧<sup>た</sup>に読むことに最初から長けていた。
- イ 子どもを良い方向に導きたいと願う熱血漢で、どんなときでも子どもの立場でものを考えるようにしている。
- ウ 松村結梨の一件があつてから、家で親に宿題の丸つけをしてもらうという教育法に不満を持つようになった。
- エ 教育者としての経験を通して、パン屋になった今は子どもの様子や言葉から気持ちを考えるようになった。

## 二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

挨拶をしなくなりたる少女いて成長とはかく黙すことなり

(嶋田武夫作)

「く成長とはかく黙すことなり」と思春期から青年期へのこの変化をあたたく、肯定的に受けとめようとする大人たちがちゃんといてくれるのに、そんな大人の存在も目に入らないほど、Kさん、今、あなたは自意識でふくれあがって、他人の目に自分がどう映るか、そればかりが気になっているかもしれない。髪がどういうスタイルにまとまっていようが、スカート丈がどうだろうが、歩き方がどうだろうが、そんなことには他人はほとんど誰も関心など払っていないというのに、当人だけはありもしない他人の目に全神経をはりつめて、対応しようとしている。いや少なくとも中学生の私はそうでした。容姿にまるで自信のなかった私でも、一日何回鏡を見たことでしょうか。思春期から青年期のこの自意識の、なんとやっかいなことか。

何もかもがぎくしゃくとうつとうしくて、自分でも、挨拶ひとつ、なぜできないのかがわからない。自分で自分をもてあまし、もう不機嫌に黙るよりほかなくなってしまう。多くの大人が自分自身のその頃の感覚を忘れて、挨拶ぐらいすればよいものを、と若い人たちを責め、挙げ句の果てには、校区一丸となって挨拶運動まで始め、挨拶の強要へと向かう中で、「成長とはかく黙すことなり」と詠む方に新聞の歌壇で出会ったとき、私は、ああ、いらしてください、と心底嬉しくなったものです。中学生の頃にこの短歌に出会っていたら、どんなによかったかと思いましたが、でも、七〇代に入った今だって、やっぱり嬉しい。というのも、知らない小学生や中学生に大声で挨拶される度に、私は正直居心地の悪さを覚えていたからで、けれどこんなことを言ったら、いい歳をして、と笑われるでしょうか。でも、誤解しないでください。私が覚えるこの居心地の悪さは、たぶん黙すことを許さない大人の仲間自分が否応なく入れられて、若い人と向かい合わせられることからくるものです。

小さい声での挨拶ならいいの？ええ、まだましです。そこには、<sup>④</sup>かろうじてその人がいてくれるから。でも大声はつらい。当人が無理して自分を消しているような気がするからです。あるいは<sup>⑤</sup>そうすることをすでに習慣にしまっているようにも見ることが。

前に記した少女のようにわめくのもいい。仲良しの友だちと語らうのもいい。一人で黙々と歩くのもまたいい。せめて登下校の、誰の指示も受けずにいられる時間、あなたがあなたでいられますように。

でも、これは一〇代のあなたより先に、「挨拶をするみんないい子」などの標語をつくる大人たちに言うべきことですね。あなたは無理して知りもしない大人たちに挨拶をする必要はないのではないでしょうか。

私は挨拶そのものが要らないと言っているのではありません。自然に出てくる挨拶なら何も言うことはありません。欧米を旅していると、目が合うとお互いにこっとする。なんと気持ちのいいことかといつも思います。でも強制される挨拶だったら、そんな挨拶に優先してなすべきことがある。そう思うのです。

挨拶に優先してあなたがなすべきこと？ そう。それが短歌にうたわれた黙すこと。

現在にはにかむことにも、口数の少ないことにも、沈黙にも、なかなかプラスの価値が置かれませんが、さらに一人でいることにも。TVをつければ、登場する人、登場する人、みんな朝からにぎやかに笑って、しゃべりまくり、コミュニケーション能力こそ現在を生き抜くためには不可欠と、社会のリーダーを自認する人々は大声でのたまい——何がコミュニケーションかの吟味なしに——、<sup>⑥</sup> ひとり居の大切さや、黙すことの大切さを思う人の声はなかなか若い人たちの耳には届きにくくなっています。

かつて短大に勤務していた時、私は新入生にくる年もくる年も、<sup>A</sup> この短大にいる間だけでも、ひとり居の時間をたっぶり持つようにと話しましたが、授業が終わると、きまって何人かの学生に廊下でそっと呼び止められ、「ほんとうにひとりでもいいんですよね」と念を押されました。口数少なく、ひとりでいること。それがますますできにくくなっていることを痛感させられる、とりわけこの十数年でした。

<sup>B</sup> 口数が少ないこと、ひとりでいることは、本来こんなふうにつなげて考えてはいけなかもしれないかもしれません。口数の少ない人はひとりでいることが多くなりがちだけれど、この二つは直接関係があるわけではない。口数が少なくても、いつもグループの一部になっている人もいるし、おしゃべりでも、ひとり居の時間をちゃんと確保している人はいますものね。

ただ、私がかかりなのは、黙っていたいのに、無理をしても、しゃべらなくてはいけないと考える人が一〇代の人々の中にますます増えているように見えること、<sup>⑦</sup> 内容はどうであれ、しゃべるという行為そのものを価値と考える人々が多くなっているように思われることで、<sup>⑦</sup> こういう状況のもとでは他者の声に耳を傾けたり（小さな声はなおさら）、自分自身の内なる声に耳を澄ますことはむづかしくなってきたのではないかとということです。

拙訳『ゲド戦記』（岩波書店）の第一巻「影との戦い」第二章に魔法使いの賢人オジオンが、弟子入りしてきた血気はやる少年ゲドに「聞こうというなら黙っていることだ」と短く論ずる場面があります。出会ってから四〇年以上になるこの言葉を、私は

今も繰り返して思い出します。

自分自身の内なる声を聞くことができている、その声に耳を傾けることができると思えますし、**II**との対話ができている、**III**との対話もできると思うのですが。いや、もしかしたら、その逆かもしれません。**IV**の声に耳を傾けることができている、初めて自らの声に耳を傾けることができる。そんな気もしてきます。自分自身の中にたくさんの他者がいるわけですし。

が、いずれにしろ、聞こうと思ったら、まず自ら口をつぐまなくてはね。そのためには、**C**ひとりになる必要があるように思います。グルーブの端にくっついていても、できなくはないかもしれないけれど、その場合はかなりの技術がいる。自分を透明人間にする技術とか、道化師にする技術とか。その技術の習得にこれまでどれだけ多くの人が四苦八苦し、挙げ句の果てにミイラ取りのミイラになってしまったことか。

でも、やっぱりひとりになるのはつらい？ ひとりでいるのは恥ずかしい？ ひとりでいるのは負け組のすることって思ってしまう？

確かに私たちにそう思わせる空気は強い。だから学生たちもランチ・メイトを求めてさまよい、見つからなければ、トイレにひとり隠れてパンを食べるなどということまでしてしまうのですね。さらには独りを意識させられるのがいやだから学校にいかない、という人まで出てくる。

( 中 略 )

アメリカの子どもの本の作家、E・L・カニグスバークは『ベーグル・チームの作戦』(松永ふみ子訳／岩波少年文庫)の中で「成長のほんの一部分だけが、みんなの前と家族の前で起こる。あとの大部分はひとりであるときに起こる」と語っています。私はこの作家の言葉に一〇〇パーセント同意します。黙すこと、そしてひとりでいることは前述したように、自分自身との対話に不可欠で、自分自身との対話がなくては、これもすでに話したように、他者との対話もほんとうのところできないし、他者とつながることも実はできないのではないかと思っています。

(清水真砂子『大人になるっておもしろい?』より)

※ 出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。



問一 文中の A C にあてはまることを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア やはり                      イ なおさら                      ウ もつとも                      エ せめて                      オ もちろん

問二 — 線部①「この変化」とありますが、どのような「変化」のことですか。「〜という変化」につづくように十字以内で答えなさい。

問三 — 線部②「思春期から青年期のこの自意識」とありますが、どのような「意識」のことですか。次の文の空欄に適する語句を、文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

必要以上に（五字以内）を意識しすぎること。

問四 — 線部③「挙げ句の果て」とは、どのような意味ですか、「〜には」に続くように、言い換えた表現を五字以内で答えなさい。

問五 — 線部④「かろうじてその人がいてくれるから」とありますが、「その人がい」とはどのようなことを表していますか。この説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア その人の意志や気持ちを感じられるということ。                      イ その人の存在を強く実感できるということ。  
ウ その人の性格や人柄がよくわかるということ。                      エ その人が身近な存在として意識できるということ。

問六 — 線部⑤「そうすること」とはどうすることですか。十字以内で答えなさい。



問七 — 線部⑥「<sup>ひと</sup>独り居の大切さや、<sup>もく</sup>黙することの大切さ」とありますが、筆者が独りで居ることや黙することが大切である  
と考える理由にあたるものが述べられている一文を探し、初めの五字をそのまま抜き出して答えなさい。

問八 — 線部⑦「<sup>じようきよう</sup>こういう状況」とは、どのような状況をさしていますか。説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ  
選び、記号で答えなさい。

ア 何かを話すことが重要視され、黙っていることが許されなかったり、内容に関わらずとにかく話せばよいとされたり  
する状況。

イ いつも誰か<sup>だれ</sup>が話をしている、かえって黙っている人が注目を浴びたり、黙っていることがよいことだとされたりする  
状況。

ウ 話をしたがる人が増えて、多くの人が、話を聞いている相手のことを考えずに一方的に話してばかりいるような状況。

エ みんなが黙っていることにたえきれず、誰もが何かを話さなければならぬと強く思い込んでしまうような状況。

問九 文中の I IV にあてはまることばの組み合わせとして、もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で  
答えなさい。

- |   |   |      |    |      |     |      |    |    |
|---|---|------|----|------|-----|------|----|----|
| ア | I | 自分自身 | II | 他者   | III | 自分自身 | IV | 他者 |
| イ | I | 他者   | II | 自分自身 | III | 他者   | IV | 他者 |
| ウ | I | 他者   | II | 他者   | III | 自分自身 | IV | 他者 |
| エ | I | 自分自身 | II | 他者   | III | 他者   | IV | 他者 |

問十 ———線部⑧「ミイラ取りのミイラになってしまった」とありますが、この表現について以下の問いに答えなさい。

(1) 「ミイラ取りがミイラになる」というもともとのことわざの意味として、もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 誰かを探しに行った人が、逆に探されたり、説得をしにいった人が逆に説得されたりすること。
- イ 何かを探し求めてさまよい続けて、人がミイラになるほどの時間をかけても見つけられないこと。
- ウ 好きな物事に熱中するあまり、まわりのことがまったく見えないような状況になってしまうこと。
- エ 何かを取りに行った人が、目的のものとは別の代わりのものを手に入れて満足すること。

(2) この文章の中で「ミイラ取りのミイラになってしまった」とは、どのような人が、どのような人になってしまったことを意味していますか。次の文の ( A ) ( B ) にあてはまる語句を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

( A ) が結局、( B ) になってしまうこと。

- |   |                          |   |                              |
|---|--------------------------|---|------------------------------|
| A | ア グループに属さず一人でいようとした人     | B | ア グループの中で黙っていられずに、話をしてしまう人   |
|   | イ グループの中で、自分勝手に行動しようとした人 |   | イ グループの中心となり、皆をまとめるリーダーのような人 |
|   | ウ 誰かと話をしようとグループに入っていた人   |   | ウ グループの中にも、ひとりぼっちになってしまう人    |
|   | エ グループに属していても黙っていた人      |   | エ グループがいやになって、離れてしまう人        |

問十一 この文章は、筆者が中学生の女の子「Kさん」に対して、手紙で語りかける形で書かれています。この文章を通じて筆者が「Kさん」にもっとも伝えたかったことは何ですか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分らしさを見失わないこと
- イ 他者とつながることの大切さ
- ウ 大人として成長することの意味
- エ 人として守らねばいけないこと

三次の短文中の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 景気が回復のキザしが見られる。
- 2 政治のコンカンをゆるがす大事件。
- 3 深くインシヨウに残るできごと。
- 4 具合が悪いので、家でアンセイにしている。
- 5 意見が分かれて、会議がメイソウする。
- 6 公害問題について、トウロンする。
- 7 絵手紙を版画でスる。
- 8 祖父はオウネンの名投手だ。
- 9 中学生としてのジカクを持つ。
- 10 欲しいものがあるので、お金をタめる。

# 令和六年度入学試験

二月一日(午後) 実施

東京女学館中学校



## 国語 解答用紙

(字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。)

一問一

問二

問三  A

問四

問三  B

問五

問六

問七 a

問七 b

問八

ねらい。

問九

問十

問十一

二問一  A

問二

という変化

問三

問四

には 問五

問六

問七

問八

問九

問十 (1)

(2) A

B

問十一

三

9	5	1
		し
10	6	2
める		
	7	3
	る	
	8	4

評 点



受 験 番 号

氏 名